

少年の悲哀

国木田独歩

青空文庫

少年こどもの歡喜よろこびが詩であるならば、少年こどもの悲哀かなしみもまた詩である。自然の心に宿る歡喜よろこびにしてもし歌うべくんば、自然の心にささやく悲哀かなしみもまた歌うべきであろう。ともかく、僕は僕の少年こどもの時の悲哀かなしみの一ツを語ってみようと思うのである。(と一人の男が話した。)

僕は八つの時から十五の時まで叔父おじの家で育つたので、そのころ、僕の父母は東京にいられたのである。

叔父の家はその土地の豪家で、山林田畑でんぱたをたくさん持つて、家に使う男女なんによも常に七八人いたのである。僕は僕の少年こどもの時代をいなかで過ごさしてくれた父母の好意を感謝せざるを得ない。もし僕が八歳の時父母とともに東京に出ていたならば、僕の今日はよほど違つていただろうと思う。少なくとも僕の知恵は今よりも進んでいたかわりに、僕の心はフーズフーズ一巻より高遠にして清新なる詩想を受用しうる事ができなかつただろうと

信ずる。

僕は野山を駆け暮らして、わが幸福なる七年を送った。叔父の家は丘のふもとにあり、近郊には樹林多く、川あり泉あり池あり、そしてほど遠からぬ所に瀬戸内海の入江がある。山にも野にも林にも谷にも海にも川にも、僕は不自由をしなかつたのである。

ところが十二の時と記憶する、徳二郎という下男がある日、僕に今夜おもしろい所につれてゆくが行かぬかと誘うた。

「どこだ。」と僕はたずねた。

「どこだと聞かっしやるな、どこでもええじゃござんせんか、徳のつれてゆく所におもしろくない所はない」と徳二郎は微笑を帯びて言った。

この徳二郎という男はそのころ二十五歳ぐらい、屈強な若者で、叔父おじの家には十一二年から使われている孤みなしこ児である。色の浅黒い、輪郭の正しい立派な男、酒を飲めば必ず歌う、飲まざるもまた歌いながら働くという至極元氣のよい男であった。いつも楽しそうに見えるばかりか、心ばせも至つて正しいので、孤みなしこ児には珍しいと叔父をはじめ土地の者みんなに、感心せられていたのである。

「しかし叔父おじさんにも叔母おばさんにも内証ですよ」と言つて、徳二郎は歌いながら裏山に登

つてしまった。

ころは夏の最中^{もなか}、月影さやかなる夜であつた。僕は徳二郎のあとについて田んぼにいで、稲の香高きあぜ道を走つて川の堤に出た。堤は一段高く、ここに上れば広々とした野づら一面を見渡されるのである。まだ宵ながら月は高く澄んで、さえた光を野にも山にもみなぎらし、野末には靄^{もや}かかりて夢のごとく、林は煙をこめて浮かぶがごとく、背^せの低い川やなぎの葉末に置く露は玉のように輝いている。小川の末はまもなく入り江、潮に満ちふくらんでいる。船板をつぎ合わせてかけた橋の急に低くなつたように見ゆるのは水面の高くなつたので、川やなぎは半ば水に沈んでいる。

堤の上はそよ吹く風あれど、川づらはさざ波だに立たず、澄み渡る大空の影を映して水の面は鏡のよう。徳二郎は堤をおり、橋の下につないである小舟のもやいを解いて、ひらりと乗ると、今まで静まりかえつていた水面がにわかに波紋を起こす。徳二郎は、
「坊様早く早く！」と僕を促しながら櫓^ろを立てた。

僕の飛び乗るが早いか、小舟は入り江のほうへと下りはじめた。

入り江に近づくとつれて川幅次第に広く、月は川づらにその清光をひたし、左右の堤は次第に遠ざかり、顧みれば川上はすでに靄^{もや}にかくれて、舟はいつしか入り江にはいつてい

るのである。

広々した湖のようなこの入り江を横ぎる舟は僕らの小舟ばかり。徳二郎はいつもの朗らかな声に引きかえ、この夜は小声で歌いながら静かに櫓をこいでいる。潮の落ちた時は沼とも思われる入り江が高潮と月の光とでまるで様子が変わり、僕にはいつも見慣れた泥臭い入り江のような気がしなかった。南は山影暗くさかしまに映り、北と東の平野は月光蒼茫としていずれか陸、いずれか水のけじめさえつかず、小舟は西のほうをさして進むのである。

西は入り江の口、水狭くして深く、陸迫りて高く、ここを港にいかりをおろす船は数こそ少ないが形は大きく大概は西洋形の帆前船で、その積み荷はこの浜でできる食塩、そのほか土地の者で朝鮮貿易に従事する者の持ち船も少なからず、内海を行き来する和船もあり。両岸の人家低く高く、山に抛り水に臨むその数数百戸。

入り江の奥より望めば舷燈高くかかりて星かとはばかり、燈影低く映りて金蛇のごとく寂漠たる山色月影のうちに浮かんで、あだかも絵のように見えるのである。

舟の進むにつれてこの小さな港の音が次第に聞こえだした。僕は今この港の光景を詳しく説くことはできないが、その夜僕の目に映って今日なおありありと思ひ浮かべることの

できるだけを言うと、夏の夜の月明らかな晩であるから、船の者は甲板にいで、家の者は外にいで、海にのぞむ窓はことごとく開かれ、ともし火は風にそよげども水面は油のごとく、笛を吹く者あり、歌う者あり、三味線の音につれて笑いどよめく声は水に臨める青楼より起こるなど、いかにも楽しそうな花やかなありさまであつたことで、しかし同時にこの花やかな一幅の画^が図^ずを包むところの、せきりよう寂寥たる月色山影水光を忘るることができないのである。

帆前船の暗い影の下をくぐり、徳二郎は舟を薄暗い石段のもとに着けた。

「お上がりなさい」と徳は僕を促した。堤の下で「お乗りなさい」と言つたぎり、彼は舟^し中^{ゆうちゆう}に一語を交じえなかつたから、僕はなんのために徳二郎がここに自分を伴うた

のか少しもわからない、しかし言うままに舟を出た。

もやいをつなぐや、徳二郎も続いて石段に上がり、先に立つてずんずん登つて行く、そのあとから僕も無言でついて登つた。石段はその幅半間より狭く、両側は高い壁である。

石段を登りつめると、ある家の中庭らしい所へ出た。四方板べいで囲まれ、すみに用水おけが置いてある、板べいの一方は見越しに夏みかんの木らしく暗く茂つたのがその頂を出している、月の光はくつきりと地に印^{せき}して寂として人のけはいもない。徳二郎はちよつと

立ち止まつて聞き耳を立てたようであったが、つかつかと右なるほうの板べいに近づいて向こうへ押すと、ここはくぐりになっていて、黒い戸が音もなくあいた。見ると、戸にすぐ接して梯子段はしごだんがある。戸があくと同時に、足音静かに梯子段はしごだんをおりて来て、

「徳さんかえ？」と顔をのぞいたのは若い女であった。

「待ったかね？」と徳二郎は女に言つて、さらに僕のほうを顧み、

「坊様を連れて来たよ」と言い足した。

「坊様、お上がんなさいナ。早くお前さんも上がってください、ここでぐずぐずしているといけないから」と女は徳二郎を促したので、徳二郎は早くも梯子段はしごだんを登りはじめ、

「坊様、暗うございますよ」と言つたぎり、女とともに登つてしまったから僕もしかたなしにそのあとについて暗い、狭い、急な梯子段はしごだんを登つた。

なんぞ知らん、この家は青楼の一で、今女に導かれてはいつた座敷は海に臨んだ一間ひとま、欄によれば港内はもちろん入り江の奥、野の末、さては西なる海の果てまでも見渡されるのである。しかし座敷は六畳敷の、畳も古び、見るからしてあまり立派な室へやではなかつた。「坊様、さアここへいらつしやい」と女は言つて、座ぶとんをてすりのもとに運び、夏だいだいそのほかのくだもの菓子などを僕にすすめた。そして次の間をあけると酒肴さけさかなの

用意がしてある。それを運びこんで女と徳二郎はさし向かいにすわった。

徳二郎はふだんにないむずかしい顔をしていたが、女のさす杯を受けて一息にのみ干し、「いよいよ何日と決まった？」と女の顔をじつと見ながらたずねた。女は十九か二十の年ごろ、色青ぎめてさも力なげなるさまは病人ではないかと僕の疑ったくらい。

「あす、あさつて、明々やのあさつて後日」と女は指を折つて、「やのあさつてに決まったの。しかしね、わたしは今になつて、また気が迷つて来たのよ」と言いつつ首をたれていたが、そつと袖そでで目をぬぐつた様子。その間に徳二郎は手酌てしやくで酒をグイグイあおっていた。

「今さらどうと言つてしかたがないじゃアないか。」

「それはそうだけれど——考えてみると、死んだほうがなんぼ増しだか知れないと思つて」

「ハツハツ、坊様、このねえさんが死ぬと言いますが、どうしましょうか。……オイオイ約束の坊様を連れて来たのだ、よく見てくれないか。」

「さつきから見ているのよ、なるほどよく似ていると思つて感心しているのよ。」と女は言つて、笑いを含んでじつと僕の顔を見ている。

「だれに似ているのだ。」と僕は驚いてたずねた。

「わたしの弟にですよ、坊様を弟に似ているなどともつたいない事だけれど、そら、これをごらんない。」と女は帯の間から一枚の写真を出して僕に見せた。

「坊様、このねえさんがその写真を徳に見せましたから、これは宅の坊様と少しも変わらんと言いましたら、ぜひ連れて来てくれと頼みますから、今夜坊様を連れて来たのだから、たくさんごちそうをしてもらわんといけませんぞ。」と徳二郎は言いつつも、止め度なく飲んでゐる。女は僕にすり寄つて、

「サア、なんでもごちそうしますとも、坊様、何がようございますか」と女は優しく言つて、につこり笑つた。

「なんにもいらぬ」と僕は言つて横を向いた。

「それじゃ、舟へ乗りましょう、わたしと舟へ乗りましょう、え、そうしましょう。」と言つて先に立つて出て行くから、僕も言うままに、女のあとについて梯子段をおりた、徳二郎はただ笑つて見てゐるばかり。

先の石段をおりるや、若き女はまず僕を乗らして後、もやいを解いてひらりと飛び乗り、さも軽々と櫓をあやつりだした。少年ながらも、僕はこの女のふるまいに驚いた。

岸を離れて見上げると、徳二郎はてすりによつて見おろしていた、そして内よりは燈が

さし、外よりは月の光を受けて、彼の姿がはっきりと見える。

「気をつけないとあぶないぞ！」と、徳二郎は上から言った。

「大丈夫！」と女は下から答えて「すぐ帰るから待っていておくれ。」

舟はしばらく大船小船六七艘せうの間を縫うて進んでいたが、まもなく広々とした沖合に出た。月はますますさえて秋の夜かと思われるばかり、女はこぐ手をとどめて僕のそばにすわった。そしてまた月を仰ぎ、またあたりを見回しながら、

「坊様、あなたはおいくつ？」とたずねた。

「十二。」

「わたしの弟の写真も十二の時ですよ、今は十六……、そうだ、十六だけれど、十二の時に別れたぎり会わないのだから、今でも坊様と同じような気がするのですよ。」と言つて僕の顔をじつと見ていたが、たちまち涙ぐんだ。月の光を受けて、その顔はなおさら青ざめて見えた。

「死んだの？」

「いいえ、死んだのならかえつてあきらめがつきませんが、別れたぎり、どうなったのか行き方がかた知れないのですよ。両親ふたおやに早く死に別れて、たった二人の姉きょうだい弟ですから、互

いに力にしていたのが、今では別れ別れになつて、生き死にさえわからんようになりました。それに、わたしも近いうち朝鮮につれて行かれるのだから、もうこの世で会うことができるかできないかわかりません。」と言つて、涙がほおをつとつて流れるのをふきもしないで僕の顔を見たまますすり泣きに泣いた。

僕は陸のほうを見ながら黙つてこの話を聞いていた。家々のともし火は水に映つてきらきらとゆらいでいる。櫓ろの音をゆるやかにきしらせながら大船の伝馬てんまをこいで行く男は、澄んだ声で船歌を流す。僕はこの時、少年こどもごろこにも言い知られぬ悲哀かなしみを感じた。

たちまち小舟を飛ばして近づいて来た者がある、徳二郎であつた。

「酒を持つて来た！」と徳は大声で二三間先げんから言つた。

「うれしいのねえ、今、坊様に弟のことを話して泣いていたの」と女の言ううち、徳二郎の小舟はそばに来た。

「ハツハツ、おおかたそんなことだろうと酒を持つて来たのだ、飲みな飲みな、わしが歌つてやる！」と徳二郎はすでに酔つてゐるらしい。女は徳二郎の渡した大コップに、なみなみと酒をついで息もつかずに飲んだ。

「も一ツ」と今度は徳二郎がついでやったのを、女はまたもや一息ひといきに飲み干して、月に

向かつて酒気をほつと吐いた。

「サアそれでよい、これからわしが歌つて聞かせる。」

「イイエ徳さん、わたしは思い切つて泣きたい、ここならだれも見ていないし、聞こえないから泣かしてくださいな、思い切つて泣かしてくださいな。」

「ハツハツ、、、、そんなら泣きな、坊様と二人で聞くから」と徳二郎は僕を見て笑つた。女は突つ伏して大泣きに泣いた、さすがに声は立て得ないから背を波打たして苦しうであつた。徳二郎は急にまじめな顔をしてこのありさまを見ていたが、たちまち顔をそむけ、山のほうを見て黙っている、僕はしばらくして、

「徳、もう帰ろう」と言うや、女は急に頭を上げて、

「ごめんなさいよ、ほんとに坊様は、わたしの泣くのを見ていてもつまりません。……わたし、坊様が来てくださつたので弟に会つたような気がいたしました。坊様もお達者で、早く大きくなつて偉いかたになるのですよ」とおろおろ声で言つて「徳さんほんとにあまりおそくなるとお宅うちに悪いから、早く坊様を連れてお帰りよ、わたしは今泣いたので、きうのうからくさくさしていた胸がすいたようだ。」

女は僕らの舟を送つて三四丁も来たが、徳二郎にしかられてこぐ手を止めた、そのうちに二艘そうの小舟はだんだん遠ざかった。舟の別れんとする時、女は僕に向かつていつまでも「わたしの事を忘れんでいてくださいましナ」とくり返して言った。

その後十七年の今日まで、僕はこの夜の光景をはつきりと覚えていて、忘れようとしても忘れることができないのである。今もなお、哀れな女の顔が目のさきにちらつく。そしてその夜、うすいかすみのように僕の心を包んだ一片の哀情かなしみは、年とともに濃くなつて、今はただその時の僕の心持ちを思い起こしてさえ堪えがたい、深い、静かな、やる瀬のない悲哀かなしみを覚えるのである。

その後徳二郎は僕の叔父おじの世話で立派な百姓になり、今では二人の子の父親になつてゐる。

流れの女は朝鮮に流れ渡つて後、さらにいずこの果てに漂泊してそのはかない生しょうがい涯がいを送つてゐるやら、それともすでにこの世を辞して、むしろ静肅なる死の国におもむいたことやら、僕はむろん知らないし、徳二郎も知らんらしい。

青空文庫情報

底本：「号外・少年の悲哀 他六篇」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年4月17日 第1刷発行

1960（昭和35）年1月25日 第14刷改版発行

1981（昭和56）年4月10日 第34刷発行

入力：紅 邪鬼

校正：鈴木厚司

2000年7月7日公開

2004年6月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

少年の悲哀

国木田独歩

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>